

# 本学スポーツ経営専攻学生の社会人基礎力の特徴

## —同専攻での学年間での比較検討—

古田 康生\*<sup>1</sup> 原田 理人\*<sup>4</sup>

- I 序論
- II 研究目的
- III 研究方法
- IV 結果
- V 考察
- VI 結論

### I 序論

#### 1. アクティブ・ラーニングの必要性

中央教育審議会<sup>2)</sup>が2012年8月28日に答申した『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』の「4. 求められる学士課程教育の質的転換(学士課程教育の質的転換)」の中でアクティブ・ラーニングの必要性を次の通り示している。『我が国においては、急速に進展するグローバル化、少子高齢化による人口構造の変化、エネルギーや資源、食料等の供給問題、地域間の格差の広がりなどの問題が急速に浮上している中で、社会の仕組みが大きく変容し、これまでの価値観が根本的に見直されつつある。このような状況は、今後長期にわたり持続するものと考えられる。このような時代に生き、社会に貢献していくには、想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を見定める能力が求められる。生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見だしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。

すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。学生の主体的な学修を促す具体的な教育の在り方は、それぞれの大学の機能や特色、学生の状況等に応じて様々であり得る。しかし、従来の教育とは質の異なるこのような学修のためには、学生に授業のための事前の準備(資料の下調べや読書、思考、学生同士のディスカッション、他の専門家等とのコミュニケーション等)、授業の受講(教員の直接指導、その中で教員と学生、学生同士の対話や意思疎通)や事後の展開(授業内容の確認や理解の深化のための探究等)を促す教育上の工夫、インターンシップやサービス・ラーニング、留学体験といった教室外学修プログラム等の提供が必要である』(以上、中央教育審議会答申から引用)。つまり、従来の大学教育では、静粛な環境が保たれた大学講義室にて一人の教員が講義し(教え)、学生がそれを聞く(聴講)という受講学生にとって受動的で一方通行な講義形式が重要視されてきた。一方、アクティブ・ラーニングは、受講学生が少人数でグループディスカッション、または討論やディベート、さらに受講学生自身が課題解決(問題解決)のために調査、発見をしながら課題の解決に取り組むといった能動的な授業方式が求められている。

#### 2. 岐阜協立大学のアクティブ・ラーニング

岐阜県大垣市に位置する岐阜協立大学(以下、

本学とする)は、教育理念<sup>4)</sup>の一つに「地域実践教育(地域で学び、地域をつくる)」を掲げ、「講義等で得た知識をもとに、「地域」の課題を発見し、解決策を考え、提案・行動し、再び理論的な考察にまで結びつける力を養成します」と地域実践教育の必要性を唱っている。さらに、教育の特色<sup>5)</sup>の一つとして「地域実践教育」を掲げ、「知識を詰め込むだけではなく、主体的に問題意識を持って取り組むことで、物事の見方が深まる。そういった学習を積み重ねることに教育の重点を置く」と本学の教育におけるアクティブ・ラーニングの位置づけを明確化している。

本学スポーツ経営学科は、教育理念に則り、地域実践型アクティブ・ラーニングの一環として特定非営利法人大垣市レクリエーション協会や公益財団法人大垣市体育連盟といった地域スポーツ・レクリエーション団体と連携して地域スポーツ・レクリエーション事業に本学学生を参画させている。これまで、本学学生の事業参加による教育的効果・成果は、参画学生の学び・気づきに焦点化して検証してきた。その結果、事業参画によりスポーツ事業の経営的専門知識・技能(指導法や運営技能など)が習得できたと理解できる結果を報告してきた<sup>3) 6)</sup>。

近年、スポーツを専攻する学生に限らず種々の事業参加や臨地実習による効果を確認するため「社会人基礎力」が尺度として活用され、数多くの報告がされている。

まず、社会人基礎力とは、「前に踏み出す力」【アクション】、「考え抜く力」【シンキング】、「チームで働く力」【チームワーク】の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省<sup>8)</sup>が2006年に提唱した。北村ら<sup>9)</sup>は、学生のレクリエーション事業への参加体験と社会人基礎力の関連を検討したところ、事業参加学生の多くが事業に参加して良かったと回答し、3つの能力の「チームで働く力」が有意に高値を示し、3つの能力の12要素では、「知識・技能を積極的に行動して身に付けようとしている(主体性)」

と「自分なりのストレス解消法を考え実行している(ストレスコントロール)」の得点が有意に高値を示したと報告している。また、山下と行實<sup>11)</sup>は、大学と日本のプロサッカーリーグ(Jリーグ)に所属するチームとの連携によるスポーツボランティア活動の評価として社会人基礎力に着目して検討し、社会人基礎力の8要素の「主体性」、「働きかける力」、「実行力」、「計画力」、「創造性」、「発信力」、「状況把握力」、「規律性」に有意な向上が認められ、その他の「傾聴力」、「柔軟性」、「ストレスコントロール」にも効果量を確認することができたと報告している。

これまで本学学生が地域実践型アクティブ・ラーニングの一環として地域スポーツ・レクリエーション事業に参画し、その教育的効果を専門知識・技能の側面から検討してきた。今後はさらに関連する研究の質を深めるために社会人基礎力を尺度に学生の事業参加による教育的効果を検証する必要がある。そこで本学学生の地域事業への参画の効果を検証するために、まずは本学学生の社会人基礎力の実態を明らかにする必要がある。

## II 研究目的

本学経営学部スポーツ経営学科でスポーツを専攻する学生の社会人基礎力の実態を把握することを目的とした。なぜなら本学の教育の特色<sup>5)</sup>の一つである地域実践型アクティブラーニング(地域実践型教育)をスポーツ経営人材の育成においても導入してカリキュラムに組み込む検討をしている。そこで、育成カリキュラムを導入するにあたり本学学生の社会人基礎力の特徴を明らかにして実態把握を試みることにした。

なお、今回は調査対象となった学生数が学年によって偏りがあるため統計処理は実施せず学年間や学年内で比較検討して特徴の傾向を把握するに留めることとする。

### III 研究方法

#### 1. 調査方法

本学経営学部スポーツ経営学科に在籍する学

生188名に質問紙を配布し、回答が得られ欠損値のない152名を調査対象とした。学年別、性別の対象者数を表1に示した。

表1 調査対象学生数

	1年次	2年次	3年次	4年次	小計
男子学生	95	11	15	7	128
女子学生	7	3	11	3	24
小計	102	14	26	10	152

単位:人数

#### 2. 調査期間

調査期間は2022年前期授業および夏季集中講義が対面で実施されている2022年7月初旬から8月初旬であった。

#### 3. 調査方法

調査は無記名自記式質問紙法を用いた。質問紙の配布は集合配布とし、本学講義室にて依頼文書および質問紙を配布して文書と口頭により研究主旨の説明をして研究協力を依頼した。研究に関する主旨や回答方法、質問紙の回収法、倫理的配慮など一連の説明をし、研究者が講義室を退室した後に調査対象学生は質問紙に回答し、質問紙は回収ボックスに提出させ、留め置き法にて回収した。

#### 4. 調査期及び調査実施授業科目

- (1) 2022年7月:生涯スポーツ論(1年次、2年次以上学生)、演習Ⅱ(3年次学生)
- (2) 2022年8月:夏季集中講義:野外活動(キャンプ)(2年次から4年次学生)

#### 5. 調査内容(項目)

- (1) 基本属性:学年、年齢、性別
- (2) 課外活動の実施状況(高等学校及び大学での部活動所属状況)
- (3) 社会人基礎力

本研究での社会人基礎力の調査には、NPO法人日本インターンシップ推進協会がWeb上にて提供している「社会人基礎力自己評価シート」を使用して質問紙を作成し、現時点で自覚する社会人基礎力を自己評価させた。本研究で用いた社会人基礎力の自己評価質問紙は3つの能力の計12要素から質問項目が構成され、5段階で

自己評価させた。5段階の各得点の評価基準は、得点5が「とても良くあてはまる」、得点4が「良くあてはまる」、得点3が「どちらともいえない」、得点2が「あまりあてはまらない」、得点1が「あてはまらない」と設定した。そして、各能力要素の質問項目の自己評価得点を平均化して代表値とし、それを12の能力要素における自己評価得点とした。

#### 5. 用語の定義

本研究で用いる「社会人基礎力」とは、2006年に経済産業省が提唱した定義である。すなわち、「職場や社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な能力」とした。この能力は3つの(1)「前に踏み出す力(アクション)」:一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力、(2)「考え抜く力(シンキング)」:疑問を持ち、考え抜く力、(3)「チームで働く力(チームワーク)」:多様な人々とともに、目標に向けて協力する力の能力で構成され、さらにそれぞれの下位項目としてアクションは主体性、働きかけ力、実行力。シンキングは、課題発見力、計画力、創造力。チームワークは発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力12要素がある。本研究では調査開始にあたり、「社会人基礎力」を『3つの能力および12の能力要素を内容とする。その能力を発揮するにあたって、自己を認識してリフレクション(振り返り)しながら、目的、学び、統合のバランスを図ることが自らキャリアを切りひらいていく上で必要と位置づけられます』と口頭及び図示して説明した。

## 6. 倫理的配慮

研究協力を得た調査対象となった学生の188名に対して、研究主旨と実施の意義、調査方法、研究結果の公表においては、個人情報保護を遵守し、得られたデータは統計的に処理され集団の結果とするため個人が特定されない、データは本研究の目的以外では使用しない、調査協力は自由であり、不参加や途中での中止であっても、不利益は生じないと説明し同意を得たのちに回答させ、回答の提出をもって同意が得られたものとした。なお、本研究は岐阜協立大学研究推進委員会規則『岐阜協立大学における研究者の行動規範』を遵守して実施した。

## IV 調査結果

### 1. 質問紙の配布と回収

質問紙は、調査期間に授業内で対象授業を履修する188名に配布され、回収され欠損値のない質問紙は152名であり、回収率は80.85%であった。

### 2. 調査対象学生の社会人基礎力の自己評価得点

#### (1) 学年別の3つの能力の自己評価総合得点平均値

表2に学年別に社会人基礎力(3つの能力)の自己評価合計得点の平均値および標準偏差を示した。3つの能力は12の能力要素で構成され、それぞれ3つの質問項目で構成されている。質

問項目ごとに加算平均され、その値を各要素の代表値とし、それを加算して社会人基礎力の自己評価合計値として示した。

表2 3つの能力学年別平均値

学年/能力	3つの能力総合得点	
	Mean ± SD	
1年次	42.36 ± 5.05	
2年次	40.44 ± 5.06	
3年次	44.61 ± 7.13	
4年次	43.48 ± 6.34	
全学年	42.64 ± 5.59	

Mea:平均値,SD:標準偏差

3つの能力の自己評価合計得点の平均値では3年次が最も高値を示し、次いで4年次、1年次の順で高値を示し、そして2年次が最も低値であった。

#### (2) 学年毎の3つの能力別の自己評価得点平均値

次に、学年別の社会人基礎力の3つの能力、すなわち【アクション】、【シンキング】、【チームワーク】の自己評価得点の平均値と標準偏差を表3に示した。なお以下、3つの能力は【 】で示す。3つの能力別の自己評価得点では、4学年の全てが【チームワーク】の平均値が最も高い得点を示した。次いで【アクション】、【シンキング】の順であった。また、各能力の得点平均値は、2年次学生が全ての能力において最も低値を示した。

表3 3つの能力の学年別平均値

学年/能力	アクション	シンキング力	チームワーク
	Mean ± SD	Mean ± SD	Mean ± SD
1年次	3.36 ± 0.75	3.45 ± 0.86	3.65 ± 0.83
2年次	3.25 ± 0.82	3.18 ± 0.78	3.52 ± 0.85
3年次	3.49 ± 0.85	3.54 ± 0.95	3.95 ± 0.94
4年次	3.54 ± 0.69	3.33 ± 0.89	3.81 ± 0.82
全学年	3.39 ± 0.77	3.44 ± 0.88	3.70 ± 0.86

Mea,:平均値,SD:標準偏差

(3) 学年別3つの能力の12要素の自己評価得点  
表4は、学年別の3つの能力の12要素の自己評価得点平均値及び標準偏差である。以下、12の要素は、「 」で示す。ここでは、1年次学生(102名)と比較して2～3年次の調査対象学生数が少ないため(2年次学生14名、3年次学生26名、4年次学生10名)、各学年の傾向と特徴を明らかにするに留め、統計処理はしていない。

まず、1年次の【アクション】で最も高値を示したのは「実行力」であった。次に【シンキング】では「課題発見力」がその他の要素よりも高値

であった。【チームワーク】では「傾聴力」、「柔軟性」、「状況は握力」、「規律性」の自己評価得点平均値が3.60点以上と他の要素と比較して相対的に高値となる傾向を示した。なお、ここでは「柔軟性」が3.94点と最も高値であった。

次に、2年次学生では、【アクション】が「実行力」が最も高値であった。【シンキング】では「課題発見力」が他の要素よりも高値であった。【チームワーク】では「柔軟性」、「規律性」、「状況把握」が3.6点以上であり、「柔軟性」が3.76点で他の要素よりも高値となる傾向を示した。

表4 学年別の3能力の12要素

		1年次	2年次	3年次	4年次
		Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
アクション	主体性	3.35 (0.60)	3.29 (0.78)	3.55 (0.81)	3.46 (0.49)
	働きかける力	3.15 (0.79)	3.01 (0.80)	3.29 (0.79)	3.50 (0.84)
	実行力	3.60 (0.78)	3.41 (0.82)	3.64 (0.94)	3.65 (0.75)
シンキング	課題発見力	3.50 (0.83)	3.29 (0.80)	3.49 (0.80)	3.15 (0.89)
	計画力	3.37 (0.91)	3.20 (0.80)	3.66 (0.95)	3.50 (0.98)
	創造性	3.49 (0.85)	3.06 (0.79)	3.44 (1.09)	3.34 (0.87)
チームワーク	発信力	3.33 (0.77)	3.18 (1.20)	3.47 (0.86)	3.20 (0.35)
	傾聴力	3.62 (0.82)	3.32 (0.74)	3.97 (0.81)	3.80 (0.89)
	柔軟性	3.94 (0.78)	3.76 (0.75)	4.48 (0.76)	4.47 (0.84)
	状況把握力	3.69 (0.84)	3.69 (0.74)	4.17 (0.87)	3.90 (0.69)
	規律性	3.87 (0.71)	3.70 (0.74)	4.09 (1.02)	3.98 (0.84)
	ストレスコントロール	3.44 (0.91)	3.49 (0.85)	3.50 (0.97)	3.53 (0.76)

さらに、3年次学生では、【アクション】では「実行力」が最も高値であった。【シンキング】では「計画力」が最も高値であった。この「計画力」は全学年の【シンキング】で最も高値な自己評価平均値得点であった。【チームワーク】では「柔軟性」が4.48点と最も高値であった。この得点は全学年の【チームワーク】で最も高値であった。

最後に、4年次学生では【アクション】が「実行力」、【シンキング】が「計画力」、そして【チームワーク】では「柔軟性」が最も高値を示した。その中でも「柔軟性」は全ての学年で最も高値であった。

【アクション】では全ての学年が「実行力」で高値となる結果であった。【シンキング】では

1、2年次学生では「課題発見力」、3年次と4年次では「計画力」が高値を示し、下級生と上級生で異なる傾向を示した。【チームワーク】では全学年で「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」の4つの要素が高値を示す傾向が認められた。なお、「柔軟性」の自己評価得点平均値は全ての学年で他の11の要素の得点と比較して最も高い得点を示す結果となった。

(4) 1年次(初年次)学生の社会人基礎力の自己評価合計得点上位と下位の比較

本学では地域実践教育を教育理念に掲げ実践している。本学スポーツ経営学科でも地域実践型アクティブ・ラーニングの一環として地域スポーツ団体(大垣市レクリエーション協会など)と連携して種々の地域スポーツ・レクリエー

ション事業を協働で企画・運営している。その事業に今後参画するであろう1年次(初年次)学生の自己評価得点を対象に、自己評価

合計得点上位25%と下位25%を抽出して得点の比較したのが表5と表6である。

表5 1年次学生の3能力合計得点上位25%と下位25%の比較

能力	アクション			シンキング力			チームワーク		
	Mean	±	SD	Mean	±	SD	Mean	±	SD
上位25%	3.80	±	0.77	4.09	±	0.72	4.19	±	0.75
下位25%	3.08	±	0.67	3.01	±	0.76	3.15	±	0.73

Mea:平均値,SD:標準偏差

まず、表5に上位群と下位群の【アクション】、【シンキング】、【チームワーク】の3つの能力の平均値及び標準偏差を示した。いずれの能力も0.72点から1.08点の差が認められたが、一つの能力だけに特異的な差が生じるといった傾向は認められることはなく一定の差であった。

次に、3つの能力の12要素ごとについて比較した結果を表6に示した。まず【アクション】では上位群と下位群では「主体性」が20%程度

の差であるが、「実行力」では25%程度の差があった。【シンキング】については上位群と下位群では、いずれの要素も30%強の差が認められ、「計画力」では37%の差があった。そして【チームワーク】ではいずれの要素も30%程度の差が認められた。「発信力」と「状況把握力」では、38.96%と38.24%の差があった。

表6 1年次学生の自己評価合計得点上位・下位の比較

		上位25%			下位25%		
		Mean	±	SD	Mean	±	SD
アクション	主体性	3.72	±	0.66	3.09	±	0.46
	働きかける力	3.50	±	0.65	2.82	±	0.73
	実行力	4.18	±	0.84	3.33	±	0.69
シンキング	課題発見力	4.15	±	0.73	3.03	±	0.64
	計画力	4.12	±	0.71	3.00	±	0.87
	創造性	4.00	±	0.75	3.00	±	0.79
チームワーク	発信力	3.96	±	0.66	2.85	±	0.67
	傾聴力	4.12	±	0.86	3.21	±	0.70
	柔軟性	4.46	±	0.71	3.36	±	0.65
	状況把握力	4.23	±	0.65	3.06	±	0.75
	規律性	4.38	±	0.57	3.36	±	0.65
	ストレスコントロール	4.00	±	0.89	3.03	±	0.85

## V 考察

本研究では本学経営学部スポーツ経営学科にてスポーツを専攻する学生の社会人基礎力の実

態把握を目的に調査を実施し、社会人基礎力の自己評価合計得点と3つの能力の12要素について学年別に平均値を算出して比較検討した。また、1年次学生を対象に社会人基礎力の自己

評価合計得点の上位25%と下位25%を抽出して比較検討した。それは本学の教育理念<sup>4)</sup>の一つの地域実践型教育、すなわち、地域実践型アクティブ・ラーニングがあり、地域スポーツ・レクリエーション団体と連携を図り、協働してスポーツ事業に参画する専門教育科目の授業(例:スポーツ経営演習Ⅱなど)が2年次以降から始まる。そのため、まずは本学学生の特徴を把握する目的で本研究を実施した。なお、今回は調査対象学生数に学年間で偏りがあるため統計処理は実施せず傾向の把握にとどめた。

#### (1) 学年別の3つの能力の自己評価合計得点平均値

学年別に社会人基礎力の自己評価得点合計値を比較検討したところ、3年次学生が44.61±7.13点で最も高値を示した。次いで4年次学生が43.48±6.34点、1年次学生が42.36±5.05点の順であった。最も低値は2年次学生で40.44±5.06点であった。安藤と藪田<sup>1)</sup>と藪田と安藤<sup>10)</sup>は看護学生を対象に社会人基礎力を調査した結果、2年次学生の自己評価得点合計値が最も低値となる傾向を報告している。この要因として調査時期も一つの理由として挙げている。看護学生2年次では基礎看護学実習Ⅱを控え種々の演習授業での課題解決が自分の思うように進まず、実力不足を自覚し、自己評価が低く作用した結果社会人基礎力合計値が低値になったと推察している。また、同じく看護学生を対象に同様な結果を確認した市川と山野内<sup>7)</sup>は学習が進むにつれ求められることも難度が増し、自分の能力や課題解決が思うようにいかず自己評価が低くなると報告している。しかし、本研究で対象となったスポーツ専攻学生は看護実習など外部での実習などはなく、2年次学生が低値を示した理由は詳細には説明できない。一つの仮説ではあるが本研究対象学生の多くが強化指定クラブに所属しており、部活動で求められる役割とその難度が増し、自己評価得点が1年次よりも低下した可能性は否定できない。また、2年次になり本格的に専門教科の履修授業コマ数が増え、授業難度が増し、授業課題が思うようにできないことが得点合計値に影響しているのか

もしれない。何よりも、本研究では2年次以上のサンプル数が少なく、十分な検討に耐えうる結果が得られていない。この点は本研究の限界であり、引き続き研究を続けて検討しなければならない。

#### (2) 学年毎の3つの能力別の自己評価得点平均値

学年別に3つの能力毎の自己評価合計値を比較したところ、いずれの学年も【チームワーク】が【アクション】と【シンキング】よりも高値になる傾向を示した。北村ら<sup>9)</sup>の報告でも同様に、【アクション】と【シンキング】よりも【チームワーク】の自己評価得点合計値が高かったとされ、本研究でも同様な結果を得た。【チームワーク】は、「発信力」、「傾聴」、「柔軟性」、「状況判断」、「規律」そして「ストレスコントロール」の6つの要素で構成されている。本研究での対象者の多くは強化指定クラブに所属しており、【チームワーク】を構成する6つの要素は日常的に部活動の場面で発揮されるため全ての学年で高くなる傾向を示したのではないかと考えられる。

#### (3) 学年別3つの能力の12要素の自己評価得点

【アクション】では全ての学年で「実行力」が最も高くなる傾向があった。「実行力」は「目標を設定し、確実に行動する力」とされ、“自ら目標を設定してその達成に取り組む”、“目標達成の手順、方法を考え確実に進める”、“困難に遭遇しても粘り強く行動する”という質問項目で構成されている。これらは大学スポーツ(特に競技スポーツ)の活動において日常的に意識して実践されなければ目標とする戦績を達成・到達しないと考えられ、「実行力」の自己評価得点合計値が全ての学年で高くなる傾向を示した背景の要因と推察された。

【シンキング】では1、2年次学生の自己評価得点平均値は「課題発見力」が最も高くなる傾向を示し、3、4年次学生では「計画性」が高値を示した。「課題発見力」とは「現状を分析し、目的や課題を明らかにする力」とされ、“現状を的確に把握し分析する”、“分析結果をもとに問題点を見出す”、“取り組むべき課題を明確にする”という質問項目で構成されている。ここで

も日常的な部活動の中において結果（戦績）を残すために現状の把握と分析により、問題点や課題を見出し、目標設定していることが伺える結果であった。一方、「計画力」は「課題解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力」であり、「課題発見力」よりも一つ先に進んだ段階と考えられる。そのため上級生である3、4年次学生では「課題発見力」よりも「計画力」の得点平均値が高くなったのではないかと考えられた。ただし、4年次学生のサンプルは極めて少なく今後も継続して検討を加える必要がある。

#### (4) 1年次（初年次）学生の社会人基礎力の自己評価合計得点上位と下位の比較

本研究では今後地域実践型アクティブ・ラーニングの一環として地域スポーツ・レクリエーション事業に参画するであろう1年次学生を対象に個々の社会人基礎力得点合計値と基に上位25%を上位群、下位25%を下位群とし両群の特徴を明らかにするため比較検討した。その結果、【シンキング】の得点幅が大きくなる傾向を示した一方、【アクション】では得点差が小さい結果を得た。【シンキング】では「計画力」に37.33%の差が認められた。上位群は、「課題発見力」という現状の把握と分析するだけでなく、その次の「課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備する」「計画力」の段階にあると自覚しているのではないかと理解できる結果であった。【チームワーク】では「発信力」の「自分の意見を分かりやすく伝える力」と「状況把握力」の「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」の2つの要素で上位群が38%強上回る結果であった。「発信力」では「事前にポイントを整理している」、「要点を抑えて理路整然と話す」、「相手の立場や気持ちを考えて話す」の質問項目で構成されるため、上位群は相手のことを考えて理解できるように心がけてコミュニケーションを図っていると理解できる結果であった。また、「状況把握力」では「自分の置かれた状況・環境を把握している」、「自分に課された役割・使命を自覚している」、「周囲の人々の役割・使命と自分との関係を認識している」の質問項目で構成されている。これはチー

ムでの自分の位置づけやメンバーとの関係性を意識した行動を意味しており、上位群は下位群に比べて、チームの一員としての自分の行動や発言を意識している可能性があるのではないかと理解できる結果であった。

今回の調査はで、上位群と下位群では、20.38%から38.95%の差が認められた。しかし、12の要素で特定の要素に偏った差は認められず、全般的に一定の差がある傾向を示した。

今後、地域スポーツ・レクリエーション事業に参画することでどのような変容をするか追調査を実施する計画である。

#### (5) 初年次（1年次）と2年次以上学生上の社会人基礎力の12要素の自己評価得点の比較

本研究では2年次以上の調査対象学生が少なく、検討するに十分なサンプルが得られていない。そこで、2年次以上をまとめて、初年次（1年次）と比較することで初年次学生の特徴を明らかにしようと試みた（表7）。その結果、「柔軟性」で2年次以上の学生の得点平均値が高くなる傾向を示した。「柔軟性」は「意見の違いや立場の違いを理解する力」で、「自分の考え方ややり方にこだわらず臨機応変に対応する」、「相手の意見や立場を尊重する」、「他人の意見ややり方を受け入れて自己向上に活かしている、という質問項目から構成されている。これらの項目は、上級生となると必然的に日常的な部活動の種々の場面で求められる事象であり、上級生としての立場にて発揮されていると推察される。そのため日々の実践が自覚を生み、この「柔軟性」の得点平均値が初年次（1年次）学生よりも高い傾向を示したのではないかと理解できる結果であった。



表7 初年次と2年次以上の3能力の12要素の比較

		初年次(1年次)			2年次以上	
		Mean	±	SD	Mean	SD
アクション	主体性	3.35	±	0.60	3.45	± 0.74
	働きかける力	3.15	±	0.79	3.26	± 0.82
	実行力	3.60	±	0.78	3.59	± 0.86
シンキング	課題発見力	3.50	±	0.83	3.36	± 0.81
	計画力	3.37	±	0.91	3.51	± 0.92
	創造性	3.49	±	0.85	3.31	± 0.97
チームワーク	発信力	3.33	±	0.77	3.33	± 0.90
	傾聴力	3.62	±	0.82	3.75	± 0.84
	柔軟性	3.94	±	0.78	4.28	± 0.82
	状況把握力	3.69	±	0.84	3.98	± 0.82
	規律性	3.87	±	0.71	3.96	± 0.92
	ストレスコントロール	3.44	±	0.91	3.50	± 0.88

市川と山野内<sup>7)</sup>は、1年次学生の社会人基礎力自己評価得点平均値が上級生の値よりも高値を示す報告をし、『上級生は(専門教育の)学習が進み現実的には新しい価値を生み出したり、応用したりすることの困難さを感じられたと考えられるため、学習の進捗や自己肯定感が低くなる時期を見極めた教育支援が必要である』と提案している。本研究でも1年次学生が2年次学生よりも社会人基礎力自己評価得点平均値が高値を示す傾向が認められた。そのため、本学でも2年次からの専門教育の進捗などや種々のスポーツ団体と協働して地域実践型アクティブ・ラーニングを進める過程でタイミングを見極めて学習支援が必要と考えられる。また、今回の調査で社会人基礎力の平均値が高値を示した能力要素の背景の多くは大学スポーツの強化指定クラブとしての部活動が強く作用していると推察される結果であった。これは大学での専門教育科目が社会人基礎力の向上に十分作用していないとも考えられ、文部科学省が推進する大学教育でのアクティブ・ラーニングを意図的に授業運営に組み込み、学生が大学の正課教育にて成長を自覚できるような授業運営が求められている結果となった。本学大学教育としての授業運営方法を社会が求める人材育成のため再構築しなければならない。

## VI 結論

本研究では、スポーツを専攻する本学学生を対象に社会人基礎力の特徴を明らかにすることを目的とした。その結果次のことが明らかとなった。

- (1) 社会人基礎力自己評価合計得点は、3年次学生が最も高値を示し、次いで4年次、1年次の順で、2年次学生が最も低値であった。
- (2) 3つの能力では全ての学年で【チームワーク】が最も高値を示した。
- (3) 3つの能力の12要素では、【アクション】では全ての学年で「実行力」が高値を示したが、【シンキング】では下級生(1・2年次)が、「課題発見力」、上級生が(3・4年次)が「計画力」がそれぞれ高値であり、学年で異なる傾向であった。【チームワーク】では、全学年が「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」が高値を示した。
- (4) 初年次(1年次)学生の社会人基礎力合計得点の上位25%と下位25%を比較検討したところ、両群間には、いずれかの能力要素に偏らず、総じて同程度の得点差が認められた。
- (5) 初年次学生の社会人基礎力自己評価合計得点は2年次学生より高値であったが、今後専門科目の増加やスポーツ系部活動での求められる役割とその責任が増すと推測されるため、適切な支援が必要であろう。

## 引用文献・参考文献

- 1) 安藤恵子, 藪田素子(2015) 3年課程看護学生の社会人基礎力の学年別傾向に関する一考察, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要第11号, p 55-63
- 2) 中央教育審議会(2012) 求められる学士課程教育の質的転換, 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申), p9-10, [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (最終アクセス2022年12月25日)
- 3) 古田康生, 原田理人(2022)PBL型授業で地域レクリエーション事業にスタッフ参加した学生の学びの分析—2020年度のスタッフ参加学生の学びに焦点を当てて—, 岐阜協立大学論集第56巻第1号, p 109-122
- 4) 岐阜協立大学, 大学概要, 教育理念, <https://www.gku.ac.jp/about/outline/educationalideal.html> (最終アクセス2022年12月25日)
- 5) 岐阜協立大学, 教育・研究, 教育の特色, [https://www.gku.ac.jp/educational\\_research/feature.html](https://www.gku.ac.jp/educational_research/feature.html) (最終アクセス2022年12月25日)
- 6) 原田理人, 古田, 康生, 小原慶祐(2021)Fリーグ(共同開催試合)集客事業に参画した学生の学び分析, 地域創生第40号, p 49-58
- 7) 市川裕美子, 山野内靖子(2018)看護学生の社会人基礎力の学年別自己評価と変化, 八戸学院大学紀要第56号, p 161-166
- 8) 経済産業省(2018)「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」(人材力研究会) 報告書, [https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001\\_1.pdf](https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf) (最終アクセス2022年12月25日)
- 9) 北村裕美, 松尾純子, 水流寛二, 関和俊, 大島秀武(2015)レクリエーション事業の体験が学生の社会人基礎力に与える影響, 自由時間研究第40号, p34-40
- 10) 藪田素子, 安藤恵子(2017)看護基礎教育における社会人基礎力の学年別実態, 医療の広場第57巻第5号 p24-29
- 11) 山下博武, 行實鉄平(2016)大学とJクラブの連携によるスポーツボランティア活動の評価: 社会人基礎力に着目して, 体育・スポーツ経営学研究第29巻, p 33-48

学生の皆さんに心から感謝いたします。なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 付記

本研究の主旨をご理解の上、調査に快く協力頂いた岐阜協立大学軽々学部スポーツ経営学科